

第 355 回松本歯科大学大学院セミナー

日 時: 2016 年 12 月 15 日(木) 18 時～20 時

場 所: 創立 30 周年記念棟大会議室(常念岳)

演 者: 菅原 準二 氏((医)歯科一番町 SAS 矯正歯科センター・主任)

タイトル: 外科的矯正治療の進歩

骨格性下顎前突に対しては、術前矯正によって切歯のディコンペンセーションや上・下顎歯列弓の調和などを図り、手術後早期に良好な顔貌と機能的な咬合を獲得するという方法が、この約半世紀の間、外科的矯正治療の標準治療と認識されてきた。しかし、その一方で、術前矯正の進行に伴って顔貌や咬合機能が悪化することや、治療期間が総じて長いことなどが、問題点として指摘されてきた。Surgery First 法(SF 法)とは、従来法の治療の質を担保しつつ、それらの問題点を解消するために考案された画期的な方法である。この方法では、術前矯正を省略し、直ちに顎矯正手術を施して顎骨の不調和を改善し、その後歯列や咬合の問題点を矯正治療によって解決するという、従来法とは逆の手順を踏んでいる。SF 法については、2009 年に私たちのチームが最初の症例報告をして以来、これまで多くの報告がなされてきたが、適応症やプロトコルなど、その内容はチーム間で著しく異なっている。しかし、これらの論文を吟味してみると、SF 法は矯正優先や外科優先とも称すべき二つのスタイルに大別されることが分かる。すなわち、前者では、骨格の問題点は外科手術で、歯列の問題は矯正治療によって改善するという考えであるのに対して、後者においては、できるだけ多くの問題点を外科手術によって改善するという考えに基づいている。我々のチームは前者の矯正優先スタイルをとっているが、その場合、術後の歯列・咬合の問題点をすべて術後矯正によって改善することになるため、矯正側がより大きな責任を負うことになる。しかし、クライアントにとっては、手術時期を最初に自分で決められること、早期に顔貌が改善すること、治療が効率的で治療期間が著しく短縮することなど、多くの利点が含まれていることから、SF 法が将来の外科的矯正治療の進むべき道であると確信している。今回の研修会においては、我々がこれまでに経験した約 200 余例の治療成績に基づいて、SF 法の診断や治療の進め方について紹介したい。

略歴:

1973 年 東北大学歯学部卒業
1973 年 東北大学歯学部 助手(歯科矯正学)
1989 年 東北大学歯学部 講師(歯科矯正学)
1991 年 東北大学大学院歯学研究科 助教授(顎口腔矯正学分野)
2006 年～ コネチカット大学 客員臨床教授
2006 年 東北大学退職
2007 年 (医)歯科一番町に SAS 矯正歯科センター併設、現在に至る